

# 文化・文芸

✉bunka@asahi.com

日曜と火～金曜掲載

## 言葉で復元 深みに到達

文芸評論家 加藤典洋さんを悼む



16日、肺炎で死去。  
71歳＝2011年撮影

最晩年の加藤さんにお送りいただいたものが、いま手元に三つある。生前最後の刊行となった『太宰と井伏』の文庫版(本年5月)と、その解説を執筆した私への礼状(3月16日付)、4月に書き下ろしで刊行された『9条入門』である。

面識がなく、文学研究者ですらない私に解説を依頼されたときは、正直戸惑った。当時すでに闘病中だった加藤さんが、拙著で書いた私の病気の体験に目を留めてのことだった。

病床では誰もが自分の身体を意識し、言葉になる以前の「肌触り」に敏感になる。加藤さんの評論には、身体感覚としてのみ感受されていた「かつての空気」を、言葉で復元し

なおす性格があり、そこに狭義の歴史学では到達しえない深みをずっと感じていた。

文芸評論とは「書かれた言葉」を媒介として、他者の身体に触れる技法なのだろう。その専門家と病気が縁で文章を交わし、著作でしかご本人を知らないままに追悼の文を綴る。奇縁というほかはない。

「憲法9条が、いつまでも最大の『戦後文学』であってよいのか」。その問いを抱いて、加藤さんは平成を駆けぬけた批評家だった。最初の著書『アメリカの影』を昭和60(1985)年に刊行し、令和の幕開けとともに立ち去った軌跡がいま、自明だったはずの「戦後」の手触りを日本人が忘れ、思い出せなくなつて

いった「平成」にびたりと重なつてみえる。

戦後50年だった1995年に世に問われた評論「敗戦後論」は、「押しつけ憲法」を攻撃する改憲論の亜種だとして猛烈な批判をあびた。きちんと読めばわかるように、加藤さんの真意はむしろ逆である。

戦争を反省し、平和を願う言葉。それを私たちは、ほんらい自分の手でつくるべきだった。しかし、GHQ案に基づく9条の出来栄があまりによかったもので、どの日本人作家の小説よりも強力な「戦後の再出発」を象徴する文章になつてしまった。日本で行われたのは、いわば過保護な占領だったと、加藤さんは考えていたように思う。

この見方は直訳調の憲法前文を揶揄した福田恆存や、過酷な収奪者としての占領軍の検閲を描いた江藤淳とは異なる。いっぽうで、敗戦国が戦勝国以上に進歩的な憲法を手にした逆説をもつて是とする柄谷行人とも違う。「あれは他者の言葉だ」という保守派の指弾にも、「内容さえよければいい」とする護憲派の居直りにも同せず、「他者の言葉を自己のものにする」作法にこだわりつけたのが加藤さんだった。

流行の言説をコピー&ペーストする思考法が蔓延し、オリジナルを作るより「要領よく組み合わせる」ビジネスが持てはやされた結果、創造の源泉としての自己を磨く態度が薄れていった平成。戦後への懐疑という点では同時代の潮流を汲みつつも、しかし徹底して「反時代的」に自身の文学を護りぬいた人として、いまはただ故人を偲びたい。後世に歴史をふり返る人はきつと、このとき「最後の文芸評論家が逝った」と記すだろうから。

(寄稿)

## 歴史学者 潤那覇 與